

まいこ 舞妓

だらりの帯^{おび}をつけ、お座敷^{ざしき}かごを抱え、おこぼ^{かか}を履いた姿^はでお馴染^{すがた}みの京都^な花街^{きょうとかがい}の舞妓^{まいこ}は、芸妓^{げいぎ}になるために修行^{しゅぎょう}中の少女^{ちゅうしょう}のこ^{しょうじょ}です。昔^{むかし}は10代^{じゅうだい}前半^{ぜんはん}の舞妓^{まいこ}も珍^{めづら}しくなかったのですが、現在^{げんざい}は中^{ちゅう}学^{がく}校^{こう}卒^{そつ}業^{ぎょう}後^ごからに限^{かぎ}られています。舞妓^{まいこ}たちは、宴会^{えんかい}や遊興^{ゆうきょう}の場^ばでお酒^{さけ}を注^{そそ}ぎ、会話^{かいわ}をして、舞^{まい}を踊^{おど}るおもてなしのプロです。失^{うしな}われがちな京^{きょう}文化^{ぶんか}を日^ひ々^び継^{けい}承^{しょう}するとい^{じゅうだい}う重大^{じゅうだい}な役割^{やくわり}を担^{にな}っていると言^いっても過^か言^{ごん}ではありません。

舞妓^{まいこ}になるには、まず仕込^{しこ}みとして、置屋^{おきや}と呼ば^よれる場所^{ばしょ}におよそ1年^{いちねん}間^{かん}住^すみ込^こみ、花街^{かがい}で生^いきるための躰^{しつげきょう}教育^{いくう}を受^{ひつよう}ける必要^{しこ}があります。仕込^{おきや}みは、置屋^{かあ}のお母^おさん、先輩^{せんぱい}のお姉^{ねえ}さん芸妓^{げいぎ}舞妓^{まいこ}の手伝^{てつだ}い、掃^{そう}除^じ、舞踊^{ぶよう}の稽古^{けいこ}などをこなしながら、花街^{がい}のしきたりや礼儀^{れいぎ}作法^{さほう}を身^みにつけていきます。その中^{なか}でも京^{きょう}言葉^{ことば}は、舞踊^{ぶよう}と並^{なら}ぶ舞妓^{まいこ}の特^{とく}に重要^{じゅうよう}なポイントで、お母^{かあ}さんやお姉^{ねえ}さんたちから厳^{きび}しく指^{しど}導^{どう}されます。たいてい10ヶ月^{じゅっかげつ}経^{けい}過^かしたところで、置屋^{おきや}のお母^{かあ}さんが日^ひ々^びの修業^{しゅぎょう}ぶりなどから舞妓^{まいこ}になるための適^{てきせい}性を総^{そう}合^{ごう}的に判^{はん}断^{だん}し、それをパ^{しこ}スした仕込^{まいこ}みは舞妓^{みなら}の見習^みいになります。その期^き間^{かん}は約1ヶ月^{やくいっかげつ}間^{かん}で、姉妹^{しまい}の盃^{さかずき}を交^かわしたお姉^{ねえ}さん芸妓^{げいぎ}についてお座敷^{ざしき}へ行^いき、現^{げん}場^ばで仕^し事^{ごと}を覚^{おぼ}えていきます。舞妓^{まいこ}としてデビュ^{みせだ}ーするの^のは店出^{みせだ}しと言^いい、3日^{みっか}間^{かん}、黒^{くろ}紋^{もん}付^つきを着^きてお姉^{げいぎ}さん芸妓^{ざしき}についてお座敷^{まわ}を回^{まわ}ります。ここから花街^{かがい}での本^{ほん}当^{とう}の修業^{しゅぎょう}の始^{はじ}まりで、舞踊^{ぶよう}に加^{くわ}えて三^{しゃ}味^み線^{せん}、囃^{はや}子^し、唄^{うた}に茶^さ道^{どう}も加^{くわ}わり、芸事^{げいごと}の稽古^{けいこ}が更^{さら}に厳^{きび}しくなり、芸^{げい}とおもてなしの^のプロを^の目^め指^ざしていきます。舞妓^{まいこ}は給^{きゅう}与^よが支^し給^{きゅう}されませんが、衣^い食^{しょく}住^{じゅう}の全^{ぜん}てと稽古^{けいこ}の費^ひ用^{よう}を置屋^{おきや}が負^ふ担^{たん}します。舞妓^{まいこ}が独^{ひと}り立^だちするまで、莫^{ばく}大^{だい}な資^し金^{きん}が必^{ひつ}要^{よう}とされ^{ひつ}ており、舞妓^{まいこ}はそれ^のを年^{ねん}季^きが明^あけるまで5、6年^ごか^{ろく}けて置屋^{おきや}に返^{へん}済^{さい}します。

舞妓^{まいこ}の1日^{いちにち}のスケジュー^{はちじご}ルは、8時^{きしょう}頃^{はじ}の起^{ちよう}床^{しよく}から始^あまりま^{じゅう}す。朝^あ食^{じゅう}の後^ご、10時^{じゅうじ}頃^ごから女^{にょ}紅^{こう}場^ばや歌^か舞^ぶ練^{れん}場^{じょう}に行^いき、舞踊^{ぶよう}や三^{しゃ}味^み線^{せん}など^の稽古^{けいこ}を行^{おこな}います。昼^{ちゅう}食^{しょく}の後^ご

は、引き続き稽古をすることもあれば、稽古の合間を縫って、お世話になっている
お茶屋や芸妓のお姉さんのところへ挨拶回りをすることもあります。午後3時頃か
ら化粧や着物の着付けなどをして、夜のお座敷に出るための準備をします。6時頃
からお座敷へ向かい、舞を披露したりゲームをしたりして宴席を盛り上げます。1
つのお座敷は約2時間ですが、深夜まで及ぶこともしばしばあるため、置屋に戻る
のは夜中の1時を回ってしまうこともよくあります。そこから化粧落としや着替え
をするので、就寝が午前2時になることも珍しくなく、かなりハードなスケジュール
と言えるでしょう。芸や茶道、行儀作法を5、6年かけて修業し、お座敷での振る
舞いも適正と認められた舞妓は芸妓になります。これは衿替と言ひ、芸妓になれば
もう置屋に頼れず、自分の芸と才能で自前にならなければなりません。芸妓には、
たちかた じかた ふた やくわり ぶよう せんもん たんとう げいぎ たちかた がつき えん
立方と地方という2つの役割があり、舞踊を専門に担当する芸妓を立方、楽器の演
奏や唄を担当する芸妓を地方と言ひます。芸妓には定年がなく、生涯芸妓を続ける
ことができます。

きょうと ぎおん こうぶ みやがわちょう ぼんとちょう かみしちけん ぎおんひがし いつ かがい
京都には、祇園甲部、宮川町、先斗町、上七軒、祇園東の5つの花街があり、こ
れを総称して五花街と呼びます。お茶屋のお座敷で舞妓と遊ぶことをお座敷遊びと
言ひ、その際にお花代、いんしょくだい えんかい しゅうぎ たてかえ みつ りょうきん
言い、その際にお花代、飲食代、宴会ご祝儀お立替の3つの料金がかかります。そ
の相場は、そうば ごうけいひとり まいこ ととき す きょうぶん
の相場は、合計1人5~9万円です。舞妓と楽しいひと時を過ごしてみるの、京文
化を理解する上で、貴重な体験となるのではないのでしょうか。